

真鶴町立ひなづる幼稚園

研究テーマ：～心と体を弾ませ、主体的に取り組める環境づくり～

1 実践の目的

心揺り動かされる環境があることで、子どもは自発的に関わろうとする。子どもが自ら環境に関わることで不思議さや面白さ、美しさ等を感じ体験して「もっと知りたい」「もっとやってみたい」という思いが芽生える。その思いが主体的に活動できる力へと育っていく。子ども自ら興味関心をもって環境に関わりながら多様な経験を重ねていけるようにするために、幼児期の発達の特性と一人ひとりの子どもの実態を踏まえ、保育の環境を計画的に構成することが重要となる。

また、教師には環境に教育価値と意図を込め、子どもの主体性と教師の意図をバランスよく絡ませた保育をしていくことが求められる。少人数保育の中での課題を乗り越える体験をどう支えていったらよいか、幼保小の円滑な接続期のプログラムという点も考慮しながら今年度も引き続き、子どもの思いや主体性を大切にしていける保育の探求・展開を大事にし、研究を深めていきたい。

2 実践の内容

(1) 研究の内容

- 子どもの思いや主体性を大切にしたい保育を探究・展開する。
- 子ども達で作り出した遊びが充実・継続し、発展していける環境づくりに取り組む。
- 幼保小中 12 年間の子どもの育ちの連続

性を大切にし、特に幼保小の接続期の円滑なプログラムの推進に取り組む。

- 実践を通して、保護者等への発信（保育ドキュメンテーション）について研究する。
- 指導主事や外部講師を招聘しての公開保育及び研究協議。外部講師とのオンラインによる研究会。（①6/3 年長②7/9 年中③8/20 オンライン④9/17 年少）
- 幼小連携研究会に進んで参加し、外部講師を招聘しての公開保育及び研究協議を行う。
- 神奈川県公立幼稚園・こども園協会や民間団体主催のオンライン研修に参加。
- 全職員による安全・適切な保育を共有する KYT 等研修（年 10 回）の実施。
- （2）保育参観・研究協議の様子

保育参観では、園長を含めた全教員で保育の様子を参観し、それぞれの幼児の動きを観察し、その内にある思いについて考察した。それぞれの見取りは協議において確認され、幼児の理解の深まりにつながった。年長では、子どもに、どのような力や姿を育てたいかを明確にし、その実現のためにどのような関わりや環境が必要かを考えながら、日々の保育を積み重ねることの重要性を再確認した。年中では、少人数保育についてスポットをあて、幼児の育ち、友達との関わりの中での成長の変化、保育の中で大切にすることを確認しながら、教師の役割について学びを深めた。年少では、3 歳児、満 3 歳児の育ちと 4・5 歳児との違いについて確認し、保育のねらいや教師の願いから

保育の展開を作り出すときに、幼児理解・幼児の発達の実情をとらえることが大切という指導案を作成する上で重要なことを再確認した。

(3) 園内研修会の様子

年間 10 回の KYT 等研修では、全職員で子どもの安全について再確認した。また、気になる園児の行動に対しての関わり方を皆で共有した。行事での動きについても検討する時間を多く設け、チームひなづるで動けるようにした。

3 実践の成果と課題

- サークルタイムで、子どもとの対話、聴く、伝え合う、振り返るといった過程を大切にしてきた。特に、運動会、食育、園外保育などの行事を年長児が中心となって企画、調整していくことで充実感や満足感を味わい、自信がつき、自発的行動へとつながっている。
- 室内遊びでは、いろいろな教材や素材のものを準備しやすく、主体的に行動できるような環境設定を整えやすいので、子ども達も積み木、ブロック、おままごとなど遊び方が自由で主体的に見立て遊びやごっこ遊びへと発展させていた。子どもが自ら選べる教材がたくさんあることで製作もしやすく想像力や創造性が刺激され遊びが長く深く続いていた。少人数で遊んでいても、遊びと遊びがつながりさらに発展していく場面も見られた。遊びの部屋を作ったことで遊びが継続することにもつながった。
- 戸外遊びでは、子ども達が点々と散って遊んでいると、盛り上がりや欠けたり、遊びの継続が難しかったりする点が課題である。主体的行動面においても遊びの継続面においても、さらなる教材研究が必要

と感じる。

- 行事は子どもとともに作ることを大切にしているため、計画、実行までの時間が短い中で、教師同士がある程度見通しを立てスムーズに行事展開ができるようにしていきたい。
- 「半島まるごと幼稚園」をキャッチフレーズに園外保育や真鶴の自然で育つ生き物や植物と触れ合う直接体験を大事にしてきた。子ども達が夢中になる体験活動を通して好奇心・探求心が育っていると感じる。今後、地域の方達の手も借りて、どのようなことが子ども達にとって大切なのかを考えながら環境を整えていきたい。
- 自分たちでいろいろな野菜を育て、食べる「食育」活動を大事にしてきた。種まきから収穫、話し合う、食するを通して、食への関心や命の大切さを学び、五感が育まれていると感じる。
- 今年度からの幼小連携研究会では小学校の先生たちと園児や児童について話し合うことで、互いの教育について理解に進展が見られた。
- KYT 等研修を通して気になる子どもの姿・支援の仕方は共通理解でき、全職員がチームとなって支援することで子ども達にとって園が安心できる環境となっている。しかし、日常の振り返りや教材準備の時間確保が難しく、行事や日々の保育の変化についての話し合いの時間が不十分な点も出てきている。更なる工夫が必要と感じている。
- 昨年度より満 3 歳児保育を導入したことや 2 学期からの年中・年長児合同保育により、自然に異年齢児との関わりが増え、年齢を超えて興味のある遊びに関わる姿が見られる。一緒に過ごす中で、トラブルも見られるが、自分たちでどうしたらよ

いか考え折り合いをつけるという姿も見られるようになってきた。今後も良さを受け入れ合い、認め合う雰囲気づくりを大切にしていきたい。しかし、クラス運営の上では育ちの違いによる保育の難しさを感じる面がある。それぞれの学年、幼児の一人ひとりの発達をより深く理解し、きめ細かい保育に努めていきたい。

- 今年も園での活動を園だより、タイムラインや写真等の掲示により子どもの様子を視覚的に記録してきた。また、保育ミーティングの中で動画を利用したり話し合いの場を作ることによって保護者に園の考え方や保育を理解してもらってきたが、まだ園理解が十分でないので、引き続き、教育方針や園での取り組みに対して理解が深まるような工夫をしていきたい。

4 今後の展開

(1) 今後の研究の方向性

- 研究のサブテーマを少し焦点化したものにし、園や各クラスの課題を一つずつ改善できるように研究を進めていきたい。室内遊びの環境構成の工夫は継続しつつ、戸外遊びの充実に向けて「安全性」と「挑戦」「自然とのふれあい」「五感を育てる」「友達や大人との関わり」「時間・空間」「教材研究」など、多岐の視点から研究を進め、遊びが充実していくようにしたい。
- 小学校との架け橋プログラムに向けて、さらに、保育園や小学校との共通理解を深めていきたい。
- 研究会で学んだことをしっかりと積み重ね、教材研究をする時間を生み出し、子ども達とともに、よりよい環境を作り出していきたい。
- 「チームひなづる」で定期的に研修し、安全への意識を高め、主体的な保育に努め

ているが、十分なレベルではない。さらに研修内容や方法の工夫をしたい。